学芸活動だより　第146号

ふるさと奥尻通信

令和8年3月31日
奥尻町教育委員会発行
事務局：01397-2-3890

海洋研修センターと稲穂ふれあい研修センターにて無料配布しています。 奥尻町役場ホームページからもダウンロードできます。

巻頭言

3月、別れの季節です。出会いは別れの始まりと誰が言ったのか知りませんが、うなずいてしまいますね。けれど、「サヨナラだけが人生じゃないさ」と恩師は言いました。春はやってきます。

特集　シンポジウム「勾玉と奥尻島」の要約②

10月26日に青苗遺跡から発見された勾玉に関するシンポジウムを開催しました。今号では前号に引き続き先生方の発表内容を極々簡単に紹介します。

☆臼杵　勲教授の発表☆

奥尻島は日本海を北上すると余市、小樽方面を通じて道北のオホーツク文化の領域に至り、さらにはサハリンに至る。南下すると、津軽海峡を経て東北北部へ至る。同時期には本州から太平洋を渡り苫小牧を経て道央部へ至るルートもあり、奥尻島へ人と文化が北と南から到来した。海を渡った直接的なロシア極東との交流は考えにくい。青苗砂丘遺跡からは5～8世紀のオホーツク文化の集落址が発見されている。前期後半～中期の住居、貝塚、墓があり、クマを含む動物儀礼の痕跡もある。6～7世紀が集落の中心で、後期段階の8世紀には希薄になる。この頃には本州から土師器を用いる集団が来島している。オホーツク文化はサハリン南西部から飛び石的に島嶼部を南下し、奥尻まで至る。そこには鉄器の獲得などの交易目的が考えられるが、続縄文系の集団を介した本州方面との交流も伺える。

勾玉と土器も展示しました

シンポジウム「勾玉と奥尻島」

趣旨説明（奥尻町教委稲垣）

8世紀中頃から道東部に鉄製品などの本州系の文物が入ってくるが、日本海ルートの寄港地として交易者が奥尻島に立ち寄った可能性もある。青苗遺跡群は奥尻と北海道、サハリン、本州以西、東アジアの動向と関連性を示す、重要な遺跡である。

☆鈴木琢也事業部長の発表☆

擦文文化を成立期（7世紀後葉～9世紀）、拡散器（10～11世紀）、変容期（12～13世紀）と3区分する。このうち、成立期には本州東北部からの影響により、土師器の影響を受けた土器様式の変化、「末期古墳」の影響による墓の形態と埋葬方法の変化、カマドを供えた竪穴住居の普及という大きな社会変化がある。7世紀以降は日本海と太平洋の両ルートによる北海道擦文文化と北東北古代文化との交流が想定される。8世紀後半からは、出羽国（秋田県域）からの日本海ルートが主流となり、須恵器など焼き物が道央部に流入したと想定されるが、蕨手刀などの鉄刀は日本海の他、太平洋ルートからも、もたらされた物が含まれよう。文献からは禁令が出るほど、毛皮交易が盛んであったことも知られる。

勾玉の出た青苗の墳墓年代である8世紀前後の遺跡に、擦文文化の米岡5遺跡とオホーツク文化の青苗砂丘遺跡がある。青苗の墳墓は伸展葬で、北東北からの「末期古墳」の影響によるものの中で捉えることもできる。日本海ルートによる対外交流の発展という視点で考えると、北海道と本州との海上交通のルート上に位置する奥尻島は、その拠点としての位置づけを有していた可能性がある。青苗遺跡の墳墓は擦文文化に関係したものの可能性を考えたい。

シンポジウム「勾玉と奥尻島」

シンポジウム会場の様子

札幌学院大学の臼杵勲教授

北海道博物館の鈴木琢也事業部長

討論会時の会場の様子

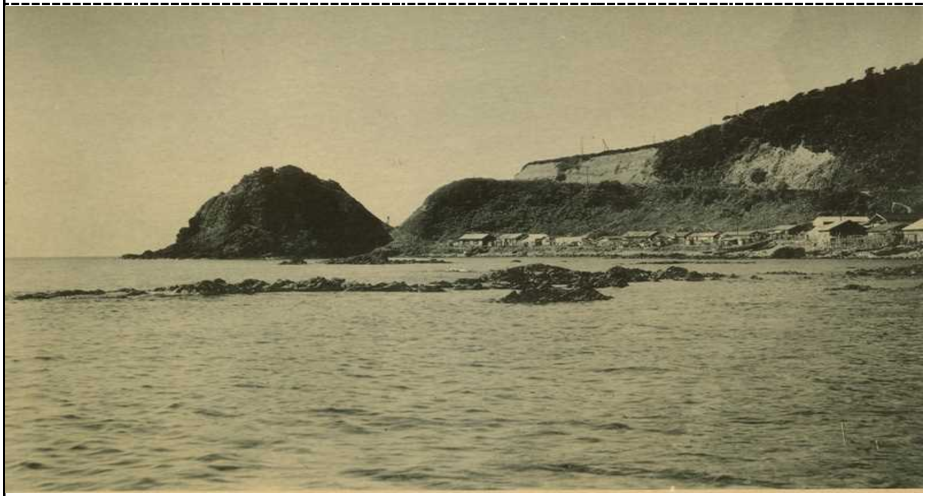
参加者アンケートから

・次は勾玉サミットorオホーツク文化サミットを開催してください。

・昨年の現地説明会と今回の講演を受け歴史の解釈の面白さ深さを学びました。

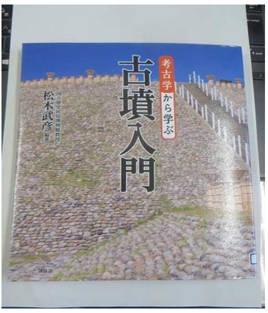
・青苗遺跡にまつられた方はどんな方だったか大変興味を持った。

奥尻写真語　第63回　弁天岬と宮津集落



北から南を向いて宮津集落方向を写した写真です。昭和30年代前半くらいでしょうか。左手にこんもりとした弁天岬、その右手に崖が白っぽく写っている上り坂が当時の道路です。岬のてっぺんには宮津弁天が建っているのですが、現在の社の前の小規模な建物であるため、はっきりとは見えていません。宮津地区の集落も、海岸線に沿ってずらりと立ち並んでいますが、今では宮津港と新道路の建設により、規模を減らしています。この海域は岩礁が入り組んでおり、昭和2年（1927）には駆逐艦「峯風」が座礁する事故が起きています。

学芸員の本棚　63冊目



学芸員オススメの一冊をご紹介します。本は海洋研修センター図書室で借りられます。

考古学から学ぶ古墳入門
松木武彦

日本列島に築かれた古墳は約15万基以上になる。古墳の誕生から盛衰、歴史の中での古墳の位置づけ、古墳の構造など詳しいながらも、判りやすく解説する。有名な「前方後円墳」だけではなく、北海道の「末期古墳」である「北海道式古墳」にも触れる。様々な副葬品や周辺情報を通じた古学的知見から埋葬者の謎にせまる入門書。

奥尻のつり　2026年新春号

3月くらいから島の対岸では漁り火が見えるようになりました。聞くと、ヤリイカのシーズンが始まり、それなりに漁獲があるようで、報道にも載っていました。けれども、対岸の騒ぎのようで、島民の口には入らなかったようです。サクラマスの声？顔？もあまりみられませんでしたが、個体数は減るものの、もう少しシーズンは続くでしょう。中旬ころから宮津弁天ではカレイとホッケがダブルで掛かる幸運も見え始めました。カレイは煮つけ、ホッケはやや干してフライが美味ですね。ここにキトビロ（行者ニンニク）が加われば晩酌が進みますね。想像しただけでビロ（よだれ）が出てきますね。春シーズンは開幕目前です。竿、リール、仕掛けの準備は万全にしましょう。仕掛けとエサはケチらないでドーンと行きましょうね！大漁の秘訣です。弁天様へのお詣り

昭和奥尻生活詩　冬休みの生活　第13回

釣石尋常小学校高等科一年生　文集「島の子」第三号

始業式が終って、帰ってから餅を焼くと、母は、「熱が上るから食べれば悪い」、と、言ったけれども聞かないで食べてしまった。其の晩は早く藥も、のまないで寝た、側にあった、蜜柑の蓋を取って、こっそり皮をむいて食ってしまった。それっきり黙って眠ってしまった。次の日、どうしたのかぱちっと目が覚めた。見ると窓から陽が入って明るく、掛蒲團に光っていた。母は御飯の支度が出来て終った所で、「起きれ、何時迄、寝ているのだ」、と、吒られた。

つづく

久しぶりの豚汁の味

二月七日、三年ぶりにスキー大会が開催されました。ここ二年は雪不足で直前に中止となって、残念な思いをしましたので、張り切つての開催となりました。そのせいか強烈な寒気が入つて非常に寒い中でしたが、約三○名の選手の熱戦が見られました。久々に豚汁が復活し、寒い身体に染みこむ旨さでした。もちろんおかわりしました。

歴史民俗資料展示室
稲穂ふれあい研修センター

稲穂ふれあい研修センター

稲穂資料館休館します

稲穂ふれあい研修センターの歴史民俗史料展示室は令和八年四月より休館することとなりました。平成十六年以来、二十二年間にわたり奥尻の歴史文化の展示や勾玉作り体験などを提供してきました。元々は震災後に再建した稲穂小学校校舎であり、通算して三十一年間の活用となりました。今後は新たな展示場所の検討を行い、収蔵資料の整理を進めていきます。

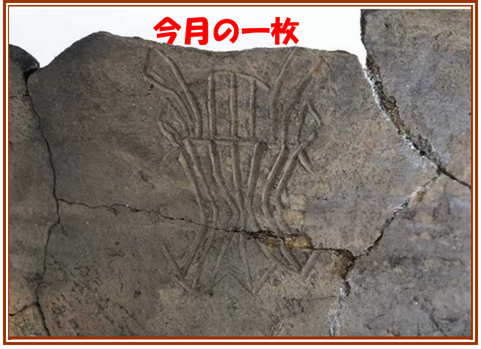
新太之記録（編集後記）

三月、お別れの季節となりました。離任の別れだけではなく、避けられぬ別れもありました。その日は名残雪が舞っておりましたが、それも涙で霞んでよく見えませんでした。私事ですが、私も新天地へ向かうこととなりました。急なことで皆様にご挨拶できず失礼いたしました。これまで大変お世話になり、ありがとうございました。

ミニマムかマキシマムか

「ミニマリスト」なる言葉があります。物を極力持たない生活の仕方、ライフスタイルのことだそうです。初めて聞きました。その対語はマキシマリストでしょうか？持ち物が多すぎて、家じゅう物だらけ、いわゆる財産もちのことですね。そのような人がいるようで、引っ越し作業に四苦八苦しているとのこと。物持ちがいいといえばそうなのですが、ほどほどに。

今月の一枚



ウマの顔に見える？擦文土器の画